

2018年5月2日

立教大学国際学術研究交流制度
2018年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	文学部・教授
	氏名	金子 明雄
受入学部・研究科・研究所		文学部
招へい 研究員	所属・職	Professor, Département de Langue et Civilisation du Japon, Institut National des Langues et Civilisations Orientales 所属機関所在国：フランス
	氏名	Emmanuel Lozerand
招へい期間		2018年4月11日～2018年4月30日（20日間）
研究経費		495,790円

2. 滞在中の活動

来日日および離日日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

*「本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動」を行った場合は、該当する活動内容に※を付してください。

年月日	活動内容
2018年4月11日	来日
2018年4月16日	プレ研究会「詩を翻訳することの可能性／不可能性をめぐって」（公開セミナー本学側登壇者3名による準備研究会）L710研究室、3名。
2018年4月20日	講義「正岡子規『病牀六尺』における俳句の位置と役割」（文学研究科大学院生向けの講義）7205教室、日文専攻の院生を中心に18名。
2018年4月21日	公開セミナー「詩を翻訳することの可能性／不可能性をめぐって」（本学学生、教職員、校友、一般向けの公開セミナー）太刀川記念館カンファレンス・ルーム、一般参加者を含め約50名。
2018年4月26日	講義「病気と文学——漱石、子規、兆民を中心に」（文学部を中心とした学部学生、大学院生への講義）MB01教室、学部生を中心に約250名。
2018年4月30日	離日

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

4月16日のプレ研究会「詩を翻訳することの可能性／不可能性をめぐって」では、4月21日に開催する公開セミナーに向けて、いくつかの中心的な論点について意見交換を行い、プログラムの最終的な調整を行った。

4月20日は、本学文学研究科の大学院生に向けて「正岡子規『病牀六尺』における俳句の位置と役割」というタイトルの講義を行った。『病牀六尺』の多岐に亘る話題の展開と要所に挿入される俳句との関係性について、同テキストの仏訳者ならではの緻密かつ繊細な分析を展開して、同テキストの実験的とも言える性格を論じた。講義の後、日文専攻を中心にした院生との間で質疑応答があり、大学院生の明治期の俳文、俳句ジャンルについての知見を深めるのに大いに役立ったと思われる。

4月21日の公開セミナー「詩を翻訳することの可能性／不可能性をめぐって」では、子規『病牀六尺』を素材に、「俳話」という文脈とそこにある「俳句」の翻訳との不可分な関係性から生じる問題を論じたロズラン氏の「俳話の中の俳句を翻訳する」と題した講演に加えて、20世紀の初めに和歌を歌詞として作曲されたヨーロッパ和歌歌曲の日本への逆輸入を話題にした坪井秀人氏（国際日本文化研究センター）「和歌を翻訳する、和歌を歌う——ヨーロッパ和歌歌曲（Waka-Lieder）におけるジャポニズムとモダニズム」、学徒兵の詩から朗読作品を制作する過程を通して、時間と空間を越えて詩の言葉を移動させることをめぐる本質的な問題に触れた金井景子氏（早稲田大学教育・総合化学学術院）「学徒兵の詩を翻訳するとしたら——竹内浩三の詩をめぐって」、「詩」を「翻訳」するとはいったい何をする事なのか、その「可能性」「不可能性」とは何かという根源的な問いを思想的に探究した澤田直氏（本学文学部）「翻訳の可能性——詩と思想の交錯の場で」の三つの講演がなされた。詩を翻訳するという行為をめぐって、異なる領域・視点から、幅広い視野の中で共有可能な論点が提出され、議論が大いに盛り上がった。本学教員、大学院生に加えて、他大学の教員、大学院生、翻訳に関わっている専門家なども数多く参加しており、活発な質疑応答がなされた。「詩の翻訳」という問題が学術的に大きな可能性をもった領域であり、その可能性を切り開くにあたって国際的な議論の場の設定が有効であることが説得的に示された公開セミナーとなった。

4月26日には、学部学生に向けた講義「病氣と文学——漱石、子規、兆民を中心に」が行われた。病床にあった正岡子規が綴った随筆、いわゆる「修善寺の大患」後の夏目漱石のエッセイ、余命宣告を受けた中江兆民が遺した手記を話題にして、表現の主体が「病んだ身体」を有することの意味を多角的に展開した講義であった。文学部を中心としたおよそ250名の学生が聴講し、「病」という一般的な関心事と明治期のエクリチュールを接続する思索のあり方に大いに啓発されたと思われる。

（特記事項）本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動を行った場合は、下記にその内容を記載してください。